
運命の導く先に

神高ミナト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

運命の導く先に

【Z-ONE】

20933

【作者名】

神高ミナト

【あらすじ】

とある事故に巻き込まれて死んでしまった青年が転生した世界は魔法少女リリカルなのはの世界だった。

何故か少年になってしまっていた青年は事件に巻き込まれていく。

プロローグ（前書き）

これは、心に深い傷を持った青年が闇に落ちる前の物語。

プロローグ

この星は嫌いだ。

天を仰ぎながら一人の青年はそう思っていた。

「もう、何も未練はない」

そう呟き、青年は空を仰ぐのをやめて下を眺める。そしてはたくさんの車がはしっていた。

しかし、青年に本当に未練がないと言わればそれは嘘である。未練があるからこそ青年はいつまでたつてもファンスに手をかけたまま動かない。

「……」

この星は嫌いだ。だけどやはり青年はいつまでたつても行動に移さない。いや、行動しようとする足が震えだす。

「……ちつ」

舌打ちをして自分の足を殴りつける。

自分の足を殴りつけながらふと足元を見ると雲がぽたぽたと流れ落ちていた。

空をもう一度仰ぎ見る。

雨など降っていない。

しかし、すぐに気づいた。自分は泣いているのだと。悔しさからぽろぼろ涙が溢れ出す。

「はは、なきねえ」

乾いた笑いと共に涙はぽろぼろと流れ落ちる。

「なきねえよほんとこ……」

青年は涙をじじじと服の袖でぬぐいつも「一度下を見る。高いと思つた。

足がまた少し震える。

「……こええよ、死にたくねえ」

またじわりと瞳から涙が浮かぶ。

青年は大好きだつただ一人の親友を思い返す。

クラスになじめずに数々のいじめにあつてきた。いじめは親の都合で転校を繰り返してもなくなることはなかつた。

青年はわからなかつた。転校を繰り返しても何故か絶対にいじめられたのだ。いじめの内容はひどいものだつた。

しかし、青年はいじめ 자체を辛いと思ったことはない。いじめられるのが当然だつたので受け入れてさえいた。ただ、青年のただ一人と呼べる親友がその世界を教えてくれた。

何度もかの転校でその親友に出会い、そして青年を身を挺して救つてくれたのだ。

初めていじめられることが無くなつた。

初めての友達ができた。

そして、絆を深めて親友になつた。

今までの出来事が当然と思つていた青年にとって、親友がくれた世界は幸せなものだつた。

本当に幸せだと感じた。

でも、幸せの時間はそう長くは続かなかつた。

青年のことによく思つていなかつた連中がまた青年をストレス解消の対象として手に入れようとした。そのいざこざの際、その事件は起つた。

それは、事故だつた。

親友は命を落とした。

青年は自分のせいだと思つた。

だから青年は自分を憎んだ。

何故こんな目ばかり会うのか？

青年は世界を憎んだ。

全てに絶望した青年は終わりを望んだ。
だから、死のうと思つた。

しかし、こぞ死のうと思つと恐怖心から足がすくんだ。なきなか
つた。

「……」

願え、さすれば『えられん

「！？」

突然青年に誰かが語りかけてくる。
びっくりしてあたりを見渡すが何もない。

青年が何事か驚いているなか、謎の声はお構いなしに語りかけてく
る。

世界を憎みし闇の波動を持つものよ、願え

「いつたいなんだよ」

世界を変える力を願え

「世界を？」

もすれば『えられん

「どうということだ？」

何が何だか青年にはわからなかつた。突然の声に驚き、そして世界
を変える力なんて言われても訳が分らなかつた。

欲しくはないか？

「？」

世界を滅ぼす力が

「なつ！」

願えれば手に入る。さあ願え

世界を滅ぼす力？

それは、世界を憎み、世界に絶望した青年が望んだ力。

悩む必要はない。

そんな力が手に入るのなら、たとえ藁にでもすがつてもいい。
突然の怪しい声。何が目的かわからない何か。だが、青年にとつて
そんなことはどうでも良いことだった。
どうせ、死のうと思っていた。

だから青年は

「俺は、力がほしい」

了承した

闇の世界に身を投じた

プロローグ（後書き）

初めまして神高ミナトです。

この作品は魔法少女リリカルなのはの一次創作です。
はつきり言ってオリ主最強ものです。

なのはシリーズ以外の作品としてはTYPE MOON作品などその他もうもうを予定しています。
つまらないかもしれませんがあくまでお願いします。

プロローグ2（前書き）

これは、心やさしい青年に救われた不幸な人たちのお話。

プロローグ2

暗闇の中に自分は漂っていた。

負の感情が渦巻くその中でただただ浮かんでいた。

ああ、自分は死んだんだなと思った。

これが死の世界だと理解した。

負の感情がうずめくこの世界こそが死の世界なのだと。

そして、悲しいと思った。

だって、この感情を作り出している者たちは、みな自らの死を憎んでいるからだ。それはすなわち、自分の生前を憎んでいることと同意。

この者たちに救いはない。

救われることなくこの世界でただ叫び続けるしかないのでから。

これだけの者達が救われないのだと、これだけの者たちが救われていいのだと、そう思うと悲しさで押しつぶされそうになる。

だが、そんなことを考える自分にも嫌気がさす。そう、これはただの同情にすぎないのだと理解したからだ。

どんなに悲しみ、憐れんだとしたとしてもその者たちに救いが訪れることがないのだから。

それでも、救いたいと思った。救われてほしいと願った。その思いに嘘はない。

……
ふと気が付いた。

自分の周りが突然輝きだしたのだ。

その輝きは自分を包み込む。包み込まれながら自分の意識は徐々に薄っていく。

薄れゆく意思の中で、誰かが自分に語りかけてきた。

その思いだけで十分私たちの思いは救われた
そなただけでも、幸せをつかんでほしい
私たちが叶えられなかつた事をどうか

そして、かすかに見た。

周りの者たちがほほ笑んでいた。

その光景を最後に、薄れゆく意識は完全に失つた。

目を覚ますと自分は泣いていた。
ただ悲しかつた。

救いたいと願つた者たちに、自分は救われたのだ。
辺りを見渡してみる。そこは見知らぬ家の庭だつた。
生前の記憶ではこんな場所は知らない。

「だれかおるん？」

突然声が聞こえたのでそちらに振り向く。
そこには車いすに乗つた少女がいた。

プロローグ2（後書き）

神高//ナトです。

今日はちょっと自分でもうまくかけてない気がします。すいません

…

これからもがんばりますのでよろしくお願いします。

第一話……始まり（前書き）

これは、始まりの物語。

運命を左右する者たちの出会い。この出会いは偶然だったのか、あるいは必然だったのだろうか

第一話……始まり

私、高町なのはは困っていた。

なぜこのような状態になつたのかが分からない。

ちゃんと、周りに人がいないことを確認して魔法の鍛錬をしていたし、レイジングハートにも人の気配を探知させていた。

しかし、それなのに閑わらず私は困っていた。

なぜなら、目の前で私と同じくらいの年の男の子が「ゴーゴー」と笑いながら私を見ていたからだ。

まず、何故？ という疑問符が頭から離れない。

私は集中して鍛錬をしていたし、周りが少し見えていなかつた。それはしようがないことだし、不注意もある。だが、レイジングハートは常に気配探知を行つてている状態であり、人が近づいて気付かないはずがないのだ。そのレイジングハートが彼、男の子の存在にまったく気付けなかつたのだ。

レイジングハートも驚いているのか動搖しているのか、不安な気持ちが私に伝わってくる。

私は警戒心を強める。

目の前の男の子をじつと見詰めつつ距離をとるために後ろに少しづつ後退していく。だが、男の子はいつの間にか私の腕をつかんでいた。まずいと思い離れようとしたところで

「さっきのなんだ？」

と、目をキラキラと輝かせながら私にそういったのだった。

私は少しあつけにとられながらも、少しだけほつとする。なんとなくだが、この男の子が悪い人には思えない。

よくよく考えてみれば、こんなにも警戒する理由が私にはない。

目の前でキラキラと目を輝かせながら私を見つめている彼をみてどうしてあんなに警戒していたのかが分からなくなつた。

「もう一回見せてくれない？」

相も変わらず興味心身に私を見る彼を見て私は笑う。

「うんいいよ。でもその前に、私はなのは。高町なのは。あなたは
？」

私は自己紹介をして、彼のことを聞いた。

「俺？ 俺の名前は海斗。八神海斗」

「海斗君だね。私のことはなのはでいいよ」

こうして私は海斗君といろいろとお話をした後に魔法を見せてあげた。

海斗君は驚きながらも私の鍛錬を集中して見ており、時折笑いながらすげえとか言っていた。

一般の人にこんな簡単に魔法なんて見せちゃっていいのかな？ なんて思つたりしたけど、もう見られてしまつてしまつてばれていたのでしようがないと思つた。

ふと、まだ魔法のことを話していいない親友の一人の顔が浮かぶ。

心の中でごめんとつぶやく。

いつか、話す機会があれば彼女たちにも隠し事をすることなく魔法の事などを話したい。

人通りいつもの鍛錬メニューをこなした折に、男の子に今日まつ終わりなことを告げる。

海斗君ははまた来てもいいか？ と聞いてきたのでうなずいて返事をする。

手を振つて海斗君と別れる。

これが、彼との最初の出会いだった。

記憶喪失になつてから一年。俺八神海斗はそれなりの毎日を過ごし

ていた。

俺は八神海斗という名前をもらった時のこと思い出す。

俺は突然八神家の庭に倒れていたそうだ。それを八神はやって、俺の家族となってくれた彼女に見つけられて、とんとん拍子に一緒に暮らすこととなつた。

今思えば、こんな不得体のしれない俺を家族として受け入れたはやってに正直驚きを隠せない。本当に優しい女の子だと思つ。

彼女が俺の名付け親である。

彼女と出逢う以前の記憶は全くなく、彼女と出逢つた時は何故かぼろぼろと涙を流していた。何か悲しい出来事があつた気がするのだが思い出せない。

はやては足が悪く、車いす生活を余儀なくされる。なので病院に通つているのだが、自分も記憶喪失なのではやてとともに病院に通うのは日課となつている。

そこでは石田先生という方によくしてもらつていて。

そんなこんなで一年はあつといつ間に過ぎ、はやてとはもう遠慮しあうことのない絆が出来上がつていて。本当の家族より仲が良いと思つのは俺の思い上がりだらうか？

そんなこんなでいろいろな出会いもあり、昨日なんか高町なのはと、いう魔法少女に出会つた。彼女との出会いは衝撃的で、彼女に出会つた時の自分の興奮状態が今振り返ると恥ずかしい……

出会つたときになのははたじろいでいた気がする。

恥ずかしい……

しかし、その出会いよりももっと衝撃的な出会いをする事になるとは思いもよらなかつた。

とある夜に、突然はやての寝室から光が进る。

はやての驚く声も聞こえてきたので、急いでその場に駆けつける。するとそこには、

見たこともない者たちがいた

はやての前で頭を垂れている様子はちょっと驚いたがそれどころではない。

よく見ると、はやては気絶していた。

「ちょ、はやて大丈夫か！？」

そこどうやら謎の四人組の者たちは俺に気付くと同時にはやての状態に気付きあせりだす。

いそいではやてを病院に連れていくのだった。

これが、俺とはやてのヴォルケンリッターたちとの出会いだった。

第一話……始まり（後書き）

神高ミナトです。

うまく書けてるでしょうか？
つまりなかつたらすいません。

次回はなるべく早く更新できるように頑張ります。

第一話……始まり2

闇の書の起動を確認した。

あれを起動させるつもりはなかつたが、思つたよりプレシアが使えなかつたので仕方ない。

プレシアの狂いようはなかなか期待感を煽るものだったが、所詮は落ちこぼれの魔導士。

少しだけ力を貸してやつたが、期待はずれに終わつた。あの程度の力で体にガタが来るようではその程度だということだ。

しかし、闇の書の主はなかなかどうして？ 最初から田に余るほどの魔力量を持つていて。

あれなら多少は体にガタが来てもプレシアのようにすぐぼろぼろになるということもないだろう。

さあ、これからどうなるか楽しみだ。

……

急いではやてを病院に連れて行つたのはいいが、あわてていたこともあつたのだろう、自分たちの格好のことに頭が回らなかつた。

「……」

突如現れたなぞの四人組の格好を改めてみる。

薄い黒の服に身を包んでいた。

どう考へてもこの寒い冬時期に着る服ではない。

それも相成つて、突然見ず知らずの四人組がはやてを病院に運んできたのだ。石田先生も当然困惑していた。

そして、その四人組は「主が」や「私は騎士」などわけのわからな

いことを口走つている。

石田先生が俺にどういふことなの？ 的な視線を送つてくるが、俺も脳みそがとつぐのとうに限界を超えておりトリップ状態なのでだんまりとしている。

この混沌とした空気ははやてが気絶から目覚めるまで続いた。

「んつ……」

はやてが軽い「めき声」をあげて目を覚ます。

「はやて！」

俺はすぐさまはやての元に駆け寄る。

「……あ、海斗君」

俺に気づいて軽くはやては微笑んだ。

そんな中、

「あの、はやてちゃん。あの人たちはいったい？」

石田先生が彼らのことを聞いてきた。

その言葉ではやても何かを思い出したのか、ぱつの悪そうな顔で四人組を見る。軽く苦笑いをしていた。

軽い沈黙。

すると、突然四人組の一人の女性が

「はい」

とつぶやいた。

その跡にははやてが驚くことを言った。

「あの、えつと、彼女らは私の親戚なんです」

「はつ？」

俺は素つ頓狂な声で驚きの声をあげる。それをはやてが「少しの間黙つといてな」と軽く俺に呟く。

石田先生も少し訝しげな顔をしていた。

「私を驚かす為にあないな格好までして。でも、私が驚きすぎてもうて」

笑いながらはやてはそう話す。

その一部始終をずっと見ていて俺はさらに頭がこんがらがったのだ

つた。

色々なこともあつたが何とか丸く？ 収まつて今は皆はやての家にいた。

そこで俺は色々なことを聞いた。
四人から、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラとそれぞれの名前を教えてもらつ。

彼らはヴォルケンリッターと呼ばれる守護騎士なのだそうだ。何でも闇の書の主はやての守り手だとか。いまいちよくわからないが……そこでは彼らは魔法が使えることも知る。

何でもはやてが突然「私の親戚なんです」とか言い出す前には、念話と呼ばれる心と心で話す魔法が使われていたとか何とか？ 実際に後で教えてもらつて自分もできるようになつた。

最初のほうはヴォルケンリッターたちははやてにかしこまつていたが、今は少し柔軟な雰囲気になつていて。

それは、はやてが彼らのことを家族として認識しているためだろう。彼ら、ヴォルケンリッター達もそんなはやての優しい心に触れて感化されたに違いない。

今はみんなでご飯を食べた後、少しまつたりしている。そこで色々話を聞いたわけだが。

「本当に主は闇の書の募集を行わないのですか？」

シグナムが突然そんなことを言った。

「必要ないよ。それに、人様に迷惑をかけたらあかんやろ」
闇の書。これも詳しい話は分からぬが、闇の書のページ全てが埋ると膨大な力が手に入るらしい。

ページを埋めるには、魔力のあるものから少しづつ奪つていかなければ

ればならないそうだ。

「しかし、主はやて本当に良いのですか？」

シグナムは少し戸惑い氣味に訴える。

「ええんよ。私は皆が一緒にいてくれるだけでもうれしいんやから」

心底うれしそうにはやてがそう言つた。

シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラの四人はビルとなぐ戸惑つて いるようだつた。

「海斗君が家族になつてくれたときもやつやつたけど、家族が一気に増えて私は幸せもんや」

はやでが本当にうれしそうに笑う姿を見て四人もまだ少し困惑氣味だつたけど、うれしそうな感じではあつた。

「まあ、はやでがそういうなら俺はもつ何も言ひとはないよ。俺たちはもう家族だ。仲良くしようぜ」

俺がみんなにそういうと、各々驚きながらも同意を示してくれた。こつして、俺たちは家族となつた。

幸せな日々は続いた。

しかし、それをあざ笑つよつて事体は最悪な方向に進みだすのだった。

第一話……始まり2（後書き）

神高ミナトです。

自分の文章力、構成力のなさに絶望する今日この頃……

日々の精進を怠らず、実力を高めていきたいなと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0933j/>

運命の導く先に

2010年11月11日06時58分発行